

父の遺贈：  
ポール・ヴァレリーと次男フランソワ・ヴァレリー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安永, 愛 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00026595">https://doi.org/10.14945/00026595</a>

## 父の遺贈

ポール・ヴァレリーと次男フランソワ・ヴァレリー

安 永 愛

### はじめに

ポール・ヴァレリー（1871-1945）について三冊の書物<sup>1</sup>を上梓しているブノワ・ペータース<sup>2</sup>は、ヴァレリーの生涯について「かつて存在した作家のなかでもっとも美しい形象を示している」<sup>3</sup>と評し、アカデミー・フランセーズ、国際連盟知的協力委員会、地中海大学センター、コレージュ・ド・フランスなど、数々の公的機関で要職を務めるようになった1920年代半ば以降のヴァレリーについて、「作家でも知識人でもない、新しい種類の名声」<sup>4</sup>を獲得したとし、「一つの形象、良心、一種の文化大使」<sup>5</sup>との評言を与えている。同時にペータースは、ヴァレリー没後、ヨーロッパでその威光が重きをなしたのは東の間であり、「不当にも、灰色がかった単色の冷たい公式性の代名詞になってしまった」<sup>6</sup>経緯<sup>7</sup>にも触れている。

「フランスでもうひとりのポール・ヴァレリーが、より複雑でより完全なヴァ

<sup>1</sup> Benoît Peeters, *Paul Valéry : une vie d'écrivain ?*, Les Impressions nouvelles, 1989, *Valéry. Tenter de vivre*, Flammarion, 2014, *Paul Valéry : une vie*, Flammarion, 2016. このうち2014年に上梓された *Tenter de vivre*については恒川邦夫による詳細な書評がある（『ヴァレリー研究』第6号、日本ヴァレリー研究会、2015年、45-52頁）。

<sup>2</sup> 1956年生まれ。フランスの作家・評論家。上記の他、『デリダ伝』（白水社、2014年）。バンド・デシネ（漫画）『闇の国々』の原作も担当。

<sup>3</sup> 三浦信孝・塚本昌則編『ヴァレリーにおける詩と芸術』（水声社、2018年）所収、ブノワ・ペータース（三浦信孝訳）「ポール・ヴァレリー、ある伝記的冒険」23頁。本書は、2017年10月に、東京の日仏会館で開催されたシンポジウム「芸術照応の魅惑3 ヴアレリーにおける詩と芸術」における日仏両語による発表を元に編まれた18編からなる論集である。この論集について筆者は週刊『読書人』（2018年11月2日号）に書評を寄せた。

<sup>4</sup> 前掲書『ヴァレリーにおける詩と芸術』32頁。

<sup>5</sup> 同書 32頁。

<sup>6</sup> 同書 35頁。

<sup>7</sup> とりわけ、ヴァレリー没後間も無くのナタリー・サロートによる評論「ポール・ヴァレリーと象の子供」での批判。Nathalie Sarraute, *Paul Valéry et l'Enfant d'Éléphant*, Les Temps modernes, n 26, janvier, 1947.

レリー像が描かれるには多くの年月が必要だった<sup>8</sup>とペータースは述べているが、ペータースの評伝はもとより、2008年には、1200頁を超えるミシェル・ジャルティによる浩瀚なヴァレリー評伝<sup>9</sup>も上梓され、作家の人生の細部が知られるとともに、ヴァレリーの数々の未公開のテキストの解明も進み、ポール・ヴァレリーという存在の、知れば知るほどに、多層的、輻輳的なありようが実感されるというのが、一ヴァレリー研究者としての印象である。

近年、ヴァレリーが友人や妻、愛人などの親密な存在との関係の中で自らの人生と作品を紡いでいくありように対する関心の高まりが見られる<sup>10</sup>。無名であったヴァレリーの青年期からの終生の友人アンドレ・ジッドとの往復書簡は比較的早く公けにされ、ヴァレリーとジッドの関係については夙に語られてきた<sup>11</sup>が、2004年には、さらに詩人のピエール・ルイスを加え三声の書簡<sup>12</sup>が編纂された。ヴァレリーの最初の愛人であったカトリーヌ・ポッジとの間で取り交わされた書簡や、晩年の愛人であるジャン・ヴォワリエことジャンヌ・ロヴィトンへの書簡や贈られた詩など、ヴァレリーのプライベートに関わるテキストが多数刊行されている<sup>13</sup>。2018年には、彫刻家であり、一時期ヴァレリーが恋情を寄せていたルネ・ヴォーチエに宛てた手紙を収めた書簡集<sup>14</sup>が公刊されて

<sup>8</sup> 同書 35頁。

<sup>9</sup> Michel Jarrety, *Paul Valéry*, Fayard, 2008.

<sup>10</sup> 森本淳生は、友人や妻、愛人などの親密な存在である他者との関係がヴァレリーにとって本質的な重要性を帯びていたことを指摘し、その理由について「他者との関係は、ヴァレリーの思索においてモデルニテの問題系と独特に絡みながら、彼の文学のあり方に決定的な作用を与えてそれをほとんど「反文学」、「不可能な文学」とでもいったものに変え、文学をその限界領域において捉えるようにヴァレリーを促したからである」と述べている。「ヴァレリーにおける他者関係の希求と「不可能な文学」」(前掲書『ポール・ヴァレリーにおける詩と芸術』所収、96頁)。

<sup>11</sup> André Gide et Paul Valéry, *Correspondance, 1890-1942*, avec préface et notes par Robert Mallet, Gallimard, 1955.

<sup>12</sup> 三者の間で取り交わされた書簡の集成。ただし、すでに出版されているジッド・ヴァレリー間の書簡は収録されていない。ヴァレリー＝ルイス間、ルイス＝ジッド間の書簡の集成。André Gide, Pierre Louys et Paul Valéry, *Correspondance à trois voix 1888-1920*, édition établie et annotée par Peter Fawcette et Pascal Mercier, Gallimard, 2004. アンドレ・ジッド、ピエール・ルイス、ポール・ヴァレリー『三声書簡 1880-1890』、松田浩則・山田広昭・塚本昌則・森本淳生訳、水声社、2016年。

<sup>13</sup> カトリーヌ・ポッジについては、自身が作家の一面を持っていたため、とりわけ関連テキストが多い。ヴァレリーとの往復書簡集に Catherine Pozzi, Paul Valéry, *La flamme et la cendre - Correspondance*, édition de Lawrence Joseph, Gallimard, 2006. ヴォワリエについては、その数奇な運命への関心も高い。またヴァレリーがヴォワリエに贈った詩が刊行されている (Paul Valéry, *Corona & Coronilla*, poèmes à Jean Voilier, Éditions de Fallois, 2008)。邦訳に『ヴァレリー詩集 コロナ・コロニラ』(松田浩則・中井久夫訳、みすず書房、2010年)がある。

<sup>14</sup> Paul Valéry, *Lettres à Nèere*, La Coopérative, 2017. Nèere とは Renée Vautier の名前 Renée のアナグラムであり、フランス・ロマン派の詩人であるアンドレ・シェニエによる有名な詩の題名でもある。

いる。しかし、最も身近な他者であると言ってよい子供との関係について触れた研究は、必ずしも深められているとは言えない。そこで、本稿においては、ヴァレリーの次男で、外交官としてOECD本部のフランス代表部付大使を長く務めたフランソワ・ヴァレリー（1916-2002）との関係に着目し、ヴァレリーという多層的な存在に新たな光を投げかけてみたい。

## 1. 詩への回帰とフランソワ誕生

ヴァレリーは、妻ジャンニーとの間に、三人の子供を授かった。1903年には長男クロードが、1906年には長女アガートが生まれている。次男フランソワが生まれたのは、1916年のことである。兄や姉とはかなり年の離れた末っ子である。三人の子供たちは、それぞれに父について公けの場で語る機会を持っており、長女アガートは、フランス・ガリマール社のプレイヤード叢書に収められたポール・ヴァレリーの著作集第1巻の詳細な年譜を作成したことで知られている<sup>15</sup>。本稿において、ヴァレリーの三人の子供の中でもとりわけ次男フランソワに焦点を当てるのは、一つには、関連するテキストが最も多く存在するからであり、前述したペータース論文のサブタイトルを借りるなら「ヨーロッパの良心」としてのヴァレリーの精神的な衣鉢を最も色濃く引き継いでいるのがフランソワであると目されるからである。

フランソワは、母ジャンニーが39歳で授かった子供である。ジャンニーは1909年頃から体調を崩し、ヴァレリーは看護に追われるようになった。療養生活が長引き、医者からはもう妊娠は難しいだろうと宣告されていた。ジャンニーは、子供は三人欲しいと願っていたので、医師の宣告は辛いものだった。ジャンニーは、フランソワを授かる前年、聖女ベルナデットの奇蹟で知られ、病の回復の一縷の望みを託し遠方からも多くの者たちが集う南仏のルルドの町を訪れている<sup>16</sup>。敬虔なカトリック教徒であるジャンニーが、神のご加護のお蔭であったと感じていたとしても不思議はない。妊娠は喜びだったが、病明けの身とあっては、出産はまさに命懸けである。里帰り出産を目前にしたジャンニーは、自宅に残っている長女アガートに宛てて以下のように書き送っている。

新しいきょうだいに会えない、お母さんを亡くした、と二つの悲しみに暮

<sup>15</sup> ほかにアルバム *Paul Valéry par Agathe Rouard-Valéry*, Gallimard, 1966, 回想録 *Crayon*, (Actes Sud, 1999) を上梓している。

<sup>16</sup> *Op.cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.385.

れることなく、あなたがこの手紙を読んでいるなら、待ちに待った弟か妹が、そちらにお目見えすることとしますよ。

死産や産褥死も覚悟していたジャンニー夫人の胸中が伺われる。ヴァレリーもその不安を払拭しきれはしなかったことだろう。フランソワは、7月17日10時36分、無事に生まれた。喜びはいかばかりであったらうか。ヴァレリーはカイエに記している。

初めての夜。人生との婚姻だ。昨日の朝に生まれて、これが初めての夜だね。君のアヒルのような声で僕たちは目が覚める。脂ぎった真っ赤な下ぶくれの顔の小さな君を僕たちは見る。君は虚空の乳を飲み、三角の形をした口の方へ手を動かそうとしている。抱いてみると、柔らかく、熱く、湿り気を帯びている。怒った表情から、この上なく凜とした穏やかさへと移り行く。君は学び、構築すべきものを全て持っているのだね。<sup>17</sup>

三人目の子供とはいえ、新しく授かった命の火照り、命の持っている無限に開かれた可塑性といったものへの驚き、おののきが感じられる記述である。二日後、ヴァレリーは役所に次男出生を届け、「フランソワ」と命名するのであるが、できればヴァレリーは次男を「ピエール」と名付けたかったという<sup>18</sup>。それは、二十年の長きにわたり詩から遠ざかっていたヴァレリーに、長編詩『若きパルク』の執筆のきっかけを与え、詩作品の完成まで、助言を惜しまなかった友人で詩人のピエール・ルイスに対する感謝の念からである。最終的に「フランソワ」の名を付けたのは、夫人の希望を聞き入れてのことであった。ミシェル・ジャルティは、その浩瀚なヴァレリー評伝の中で「もう一人のフランソワであるシャトーブリアン<sup>19</sup>が息子を聖母マリアに捧げたように。一年前、ジャンニーはルルドでまさにマリア様に祈りを捧げていたのである」<sup>20</sup>と、フランソワ命名の件について敷衍している。つまりヴァレリーは、自分の人生に転機を与えてくれた友人への感謝よりも、神に祈り、新しい命を授かった妻ジャンニー

<sup>17</sup> Paul Valéry, *Les Cahiers* VI, 1957, CNRS, p.225.

<sup>18</sup> *Op. cit.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.386.

<sup>19</sup> フランソワ＝ルネ・ド・シャトーブリアン (1768-1848)。フランス・ロマン主義の先駆者である作家。政治家。

<sup>20</sup> *Ibid.*, Michel Jarrety, *Paul Valéry*, p.386.

の感謝の思いを、より大きく深いものとして受け止めた、ということなのではないだろうか。

フランソワ誕生の時、ヴァレリーは44歳になっていた。そして、大きく二つに分かれるヴァレリーの生涯の、その後半部に差し掛かるとしていった。ヴァレリーの人生は周知のごとく、ほぼ無名のうちに過ぎた生涯の前半と、長編詩『若きパルク』の成功により一躍文壇の寵児となり、第三共和制フランスの欽定詩人的な役割、またペーターズの言うようなヨーロッパの良心、文化使節の役割をも果たすようになる生涯の後半とに分かれる。フランソワが生まれたのは、長編詩『若きパルク』をほぼ書き上げ、修正を加えながら出版を待っている時期だったのであり、ヴァレリーは詩への回帰とフランソワの誕生を、二つの輝かしく喜ばしい出来事として重ね合わせていたであろう。『若きパルク』の成功を皮切りにしたフランス第三共和制の「公的存在」としての新たな人生に乗り出すにあたり、奇蹟のようにも感じられるフランソワの誕生とその存在は、ヴァレリーを力強く鼓舞するものだったと思われる。44歳にして子供を授かったことは、父親として、何はともあれ稼ぎを得なければならないとの覚悟を求めるものでもあったはずである<sup>21</sup>。1922年にヴァレリーは長く務めたアッパス通信社の社長秘書という安定した職を、当の社長の死去により失うことになり、原稿料や講演料で稼ぐことは至上命令となった。後半生のヴァレリーの作品公刊がコンスタントになったことと、1916年の次男フランソワの誕生は、決して無縁のことではない。

## 2. 父親としてのヴァレリー—幼子フランソワ宛て書簡から

フランス国立図書館草稿部（パリ・リシュリュー通り）には、ポール・ヴァレリーから息子フランソワに宛てた128通の書簡が収蔵されている。フランソワに宛てた手紙については、1994年に刊行されたフランソワ・ヴァレリーによる『ヴァレリーの三大戦間』<sup>22</sup>に3通収められているものの、ほとんど未公開のままとなっている。筆者は2018年11月、草稿部にて、フランソワに宛てた手紙を閲読する機会を得た。本節においては、この手紙に現れている、父ヴァレリー

<sup>21</sup> ヴァレリーは結婚の際、ジャンニーの叔母ベルト・モリゾの所有する凱旋門からほど近いアパートマンを新居として譲り受けるという好条件に浴しているものの、潤沢な資産を受け継いでいるというわけでもなく、人並みの金銭的苦労からは免れなかった。株である程度の資産を蓄えていたとも言われているが、パリ16区の上層ブルジョワ的な生活を維持するには、それなりのコストがかかる。

<sup>22</sup> François Valéry, *L'Entre-trois-guerres de Paul Valéry*, Editions Jacqueline Chambon, 1994.

のありようを明らかにしていきたい。

国立図書館草稿部に収録されているフランソワ宛ての手紙は、大判のアルバム大の台紙に貼り付けられ、司書の手により整理番号が付されている。フランス国立図書館草稿部所蔵のヴァレリー関連書簡で、宛先別に分類されているのは、ヴァレリーの三人の子供のうち、フランソワに宛てた書簡のみである。NAF<sup>23</sup>19733の番号を持つ資料に収められているフランソワ宛て書簡の日付は、1918年から1941年に渡るものである。ヴァレリーは前述の通り、長編詩『若きパルク』の成功ののち、執筆や講演の依頼が引きもきらなくなった。フランス各地、また外国にも赴き講演したり、著名人や貴族の館、大使館等に招かれ社交を重ねたり、執筆の便宜のために、知人の別荘に逗留の機会を与えられるなど、自宅のあるパリを離れる機会が多かった。またフランソワが成長してからは、バカンスや研修、留学先にいるフランソワにパリの自宅から、あるいは、旅先から書簡を送ることもあった。残されているのは、メモのようなものではなく、消印の押されたはがきや手紙に限定されている。

ヴァレリーからフランソワに宛てた手紙で最も古い日付を持つものは、1918年6月10日付けのものである。フランソワがわずか1歳10ヶ月の時点ということになる。妻のジャンニーが読んでやったのだと思われるが、宛先にはフランソワ・ヴァレリーの名前が単独で記されている。犬のカラーのイラストのついた絵葉書<sup>24</sup>である。

## フランソワ君

ワンワンさんだよ。この絵葉書は、わかると思うけど、あのラファイエットで買ったものだよ。

会いたいなあ。お散歩に連れてってあげたいなあ。かわいそうなパパはパリのおうちでひとりぼっちだよ。

シャルロット<sup>25</sup>はいなくて、パパはひとりっきり。パパはおうちの仕事をし、おしっこして、うんちして、ひとやすみして、お着替えして、それからいっぱいねんねしているよ。

<sup>23</sup> Nouvelle acquisition françaiseの略。1973年以降に国立図書館草稿部に収録された資料に付される。

<sup>24</sup> NAF19733 F1. 絵葉書の印刷されたイラストのタイトルには「ゴミ掃除係」とある。

<sup>25</sup> ヴアレリー家の家政婦。

パパ。

幼児言葉が散りばめられ、幼く愛しい我が子に対する父親の思いが溢れている手紙である。ジャンニーに読んでもらい、そこからフランソワに何か伝わることを願っているのだろう。幼子の好みそうな犬の絵葉書を手に入れていることも微笑ましいし、深読みすると、この市販の絵葉書の犬のイラストのキャプションである「ゴミ掃除係」は、パリの自宅に一人残され、家事をやらなくてはならなくなった「かわいそうなパパ」の姿と、偶然かも知れないが重なっている。

同年の7月14日付けの手紙<sup>26</sup>は、二つ折りにした無地の用箋の表裏に書き留められている。手紙は、次のような印象的な言葉で始まっている。

「パパは君にお手紙を書くよ。すると君が生まれでてくるから。」

手紙は、一種のお話のようになっていて、「パパは一人で窓に向かっているよ。」の文の後、「パパ」は「彼」の代名詞に置き換えられて、軽く脚韻を踏んだ戯れ唄のようなものが続く。しかも、要所要所にイラストも描きこまれている。最初に掲げられているのは、灌木の庭に向け、開け放たれた窓のイラストである。戯れ唄の一部を掲げよう。

空が見える、ロバや子牛も。  
でもアガートもクロードもない。  
ほんとうにつまらない。

.....

この手紙には遊び心が詰まっている。羊の横顔、煙草を啜えたヴァレリーの顔のイラストも戯れ唄に添えられている。戯れ唄の最後に添えられているのは、左袖の部分に«Dimanche»と書かれたセータを着ようとしている人の姿なのだが、この左袖がひどく長い。どうやら「ああ！ある日曜日のこと／袖の部分が長いなあと思う」（Ah ! qu'il trouve long un dimanche/Du Département de la

<sup>26</sup> NAF19733 F3.

manche) という手紙の戯れ唄の一節に対応しているようだ。フランス語で日曜日の意味の«dimanche»と袖を意味する«manche»の単語の音の響きの類似を使ったダジャレ<sup>27</sup>である。子供たちに会えず、退屈を持て余す日曜日の無聊を、長い袖の服を着るのにうんざりしているような人物のユーモラスなイラストに仕上げているのである。この手紙の宛先に記されているのはフランソワの名前だけであるが、長男クロード、長女アガート、そして妻のジャンニーも一緒に手紙を読み、ユーモラスな絵も見て笑ってくれることを期待しているのだろう。文章を書くことも、デッサンを描くことも、ほとんど生理的な欲求のようでさえあったヴァレリーの才気は、フランソワに宛てた手紙の中にも煌めいている。

1921年に書かれたと思われる日付のないヴァレリーの手紙<sup>28</sup>には、フランソワからの手紙への礼が述べられている。このとき、フランソワは5歳になったかどうか、という頃である。ヴァレリーの手紙には「この手紙を一人で読めるだろうと思うよ」と書かれているので、この頃、フランソワが母親の助力なく手紙を読めるようになり始めたものと思われる。同じく1921年の日付のない別の手紙では、「僕たち、パパと君は口が悪い。犬の名前はア・キキ・ア・クク！」と最初に書いておいて、滞在先の悪口<sup>29</sup>をぶちまけてみせたりしている。母親に手紙を読んでもらわなくても大丈夫、となると、5歳の幼い息子と早くも口が悪い者同士として共謀関係に入るといっているのであるから、何とも面白い父子関係である。

### 3. 人生の先達者として一少年期・青年期フランソワ宛ての手紙から

1922年に、長く務めたアッパス通信社秘書の職を失い、フランス各地やヨーロッパの各都市に招かれ講演する機会が増えて行ったヴァレリーは、滞在先からフランソワ宛てに実にまめに絵葉書を送った。滞在先の街並みや風俗の伝わる絵葉書をそのつど手に入れていたようだ。幼いフランソワにも、遠く離れた土地への興味は自然と掻き立てられたことだろう。家庭で息子を見守れない時、ヴァレリーは、滞在先の風光を絵葉書によって伝えることで、息子にできるだけ広い世界を感じさせてやろうとしていたのではないだろうか。必ず、その土

<sup>27</sup> ヴァレリーの手紙にはダジャレがしばしば見られる。例えばbachelier (学士)をvache lié (繋がれた牛)とを掛け合わせるなど (NRF19733 F5)。

<sup>28</sup> NAF19733 F7。

<sup>29</sup> 「このドイツ人は、マリオネットみたいに働く」などと書かれている。

地の絵葉書にフランソワへのメッセージが認められているのには、父としてのヴァレリーの律儀さが感じられる。1924年4月12日付けのミラノから送った絵葉書の宛名は「Francesco Valéry」となっている。「フランソワ」の名をイタリア式にフランチェスコとしたのである。また宛先の国名も「Fancia」、都市名も「Parigi」とイタリア語式で書かれており、全体が、インクによる殊の外美しいカリグラフィーとなっている。ヴァレリーの母親はジェノヴァ出身であり、ヴァレリーのことをポールではなくイタリア語式にパオロと呼んだというから、ヴァレリーはミラノ滞在の機会に、そのイタリアの血筋を息子にも感じ取ってもらいたいと考えたのかも知れない。

フランソワが成長するにつれ、フランソワ宛ての手紙の中には、父親としてのアドバイスが見られるようになる。そのいくつかを紹介しよう。まず、1930年の日付のない手紙より引用する。

君のことを母さんが手紙で書いてくれたが、それを読んで私はとても満足しているよ。よく勉強し、家でもきちんとしているようだね。これほど嬉しいことはないよ。

のぞむらくは、勉強の他に本を読む時間が少しあると良いのだが。君の書き言葉を注意して見させてもらうよ。クレダの語源辞典を引きなさい。語源というものは、観念をギリギリと切り詰めることによって、最も抽象的な語に力と明快さをしばしば与えてくれる基盤になるものだから。<sup>30</sup>

学校の勉強に加えて本を読む時間を取ること、そして語源辞典を引く重要性を伝える書簡である。とりわけ語源辞典を引け、という助言が印象深い。ヴァレリー自身、フランス語の語源に遡り、原義を確認することによって理解を深めるという思考法をしばしば取るが、これは、詩人・思想家たる者にのみ必要なことではなく、学問のとば口に立つか立たないかの年頃にある息子にとっても有効であるとヴァレリーが考えていた証左である。

1931年10月2日、15歳のフランソワに宛てた手紙<sup>31</sup>には、将来について考えるための踏み込んだアドバイスが書かれている。一部を引用しよう。

---

<sup>30</sup> NAF19733 F58.

<sup>31</sup> NAF19733 F63.

新学期になったら、少し考えて欲しい。「勉強しろ」とは言いたくないが、バカロレアだけでなく、バカロレアの後のことも考えて欲しい。ご覧の通り…私は60歳もの高齢になろうというのに、多くの人たちが退職しようという時分に、あいかわらず取引しなくてはならないんだよ。これは、私のせいなんだが。この有様だよ。

また、1931年の日付のない別の手紙には以下のように書かれている。

今の時代は、私の時代よりもさらにはるかに、知識を基盤とした確固とした職業を持つ必要がある。そしてできる限り、私の仕事のような他人の思惑に依存するようなのではない仕事が良い。<sup>32</sup>

これらの手紙が書かれた時期、ヴァレリーはアカデミー・フランセーズの会員に選出されて5年ほどたち、その社会的名声も確固としたものになっていた。しかし、執筆や講演を引き受ける自らの仕事について「他人の思惑に依存する」仕事である、との思いをヴァレリーは持っていたようだ。60過ぎて金のためにあくせくしなければならない、という嘆息も聞こえてきそう。親世代より、子の世代の方が厳しい状況に置かれるだろうとの見方は、ヴァレリーの他の講演や『カイエ』の中にも現れている。フランソワは父の言葉をどのように受け止めただろうか。フランソワは、著名人の子供として浮つくことなく、大筋としては「知識を基盤とした確固とした職業」を持つに至ったと言えるのではないだろうか。

フランソワは長じて英文学を専攻し、ロンドンに滞在することになるが、講演先や滞在先からパリに戻ったヴァレリーは、ロンドンからフランソワの手紙が来ないと落ち着かなくなったようだ。1935年4月26日付けの手紙<sup>33</sup>には「ここ数日、君からの便りが無い。みんな君からの便りをじりじりして待っていることを考えて欲しい。家族も困るよ。」と書かれている。1938年8月には、ロンドンにいる息子を思い、タイプライターで英文の手紙を認めている<sup>34</sup>。またフランソワ宛のフランス語の手紙の中にも、英語の単語が紛れ込むことが増えていく。ヴァレリーは進路を模索中であった若い時代に、ロンドンに一時滞在し、

---

<sup>32</sup> NAF19733 F64.

<sup>33</sup> NAF19733 F82.

<sup>34</sup> NAF19733 F98.

南アフリカと商取引を行うチェタード・カンパニーで英語の仏文訳のアルバイトをしていたことがあった。フランソワが英文学を専攻する<sup>35</sup>にあたっては、大英帝国の底力を思い知っていた父ヴァレリーの思いも後押しの一要素となっていたのではないだろうか。書簡の中で英語を使用することによって目配せをくれる父を、フランソワは異国にあって、頼もしく感じていたことだろう。

父ポールのフランソワへの書簡に見られる助言は、真面目な側面に止まらない。1937年12月、スイスから帰国したヴァレリーはフランソワ宛のタイプ打ちの手紙の最後の方に、このように書き添えている。

どうか、同士モノーのことは忘れないでいてくれ。モノーは君に「眠れる袋の美女」を紹介すると約束してくれたよ。期待はし過ぎないでくれ。ヨーロッパの魔女達の鍋をひっくり返すようななんらかの地震によっても、すべての袋が空っぽになることはなかろうと思う。

だから、神が有益あるいは有害なるすべての目的の為、スーパー猿にと  
思い定めた3つか4つの器官と、それぞれが事を行う必要があるだろう。<sup>36</sup>

この書簡で「モノー」と書かれているのは、ヴァレリーの秘書役を務めていた青年<sup>37</sup>のことである。また、「眠れる袋の美女」*«la Belle au sac dormant»*という表現は、シャルル・ペローの童話のタイトル『眠れる森の美女』*La Belle au bois dormant*をもじっているのだが、この「袋」*sac*が何を指すかについてはよくわからない。ともあれヴァレリーとフランソワとの間に、この言葉を符丁のように使った会話が為されていたのだと思われる。上記の書簡では、もって回った表現がなされており、内容としてはかなり際どいものであるように思われるが、22歳になっていた息子に対し、女性と交際するきっかけを間接的にはあるが与えてやろうとする父親の像が浮かび上がってくる。下情にも通じた懐深い父の手紙と言うべきであろう。

ヴァレリーからフランソワに宛てた書簡のうち、最後に書かれたのは1941年のものである<sup>38</sup>。フランソワは25歳になっていた。バラ窓のステンドグラスが

<sup>35</sup> フランソワ・ヴァレリーは、英語の大学教授資格（アグレガシオン）を取得している。

<sup>36</sup> NAF19733 F97.

<sup>37</sup> Julien-Pierre Monodのことと思われる。

<sup>38</sup> NAF19733 F128.

印象的なサンス大聖堂のモノクロームの絵葉書であり、ただ、「君にキスを。パパ」とのみ書かれている。滞在先の風光を伝える絵葉書に子への思いを託す、父ヴァレリーの書簡の最もシンプルな形がここにある。

#### 4. しなやかな父ヴァレリー

以上の二節にわたり、次男フランソワ宛の手紙を読み解きつつ、父親としてのヴァレリーのありようについて論じてきた。ヴァレリーの息子フランソワに接するあり方からは、しなやかさが感じられる。息子の存在を慮り、まめに手紙を認め、自らの見ているものを報告する一方、自分の弱さのようなものも銜いなくさらけ出している。ただ厳格なだけの、強いだけ、正しいだけの父親ではない<sup>39</sup>。しっかりとした知見を持ちながらも、ユーモアや少し悪びれた感も息子と共有している。

幼子フランソワへの微笑ましい手紙が書き継がれている頃に重なるが、1920年頃にヴァレリーは、高名な医師の娘で、独学により深い教養を身につけたカトリーヌ・ポッジという女性と知り合い、まもなく不倫関係に落ちていく。二人の関係は、傷ついたポッジがヴァレリーの許を離れていくまで、約8年にわたって続いていく。またこれも一面の真実である。ヴァレリーは、ポッジに自分の精神に響きあうものを見出し、二人で同じ夢を見ること、二人で一つの思考と愛とを紡ぐことを熱望し始める。しかし、これは、あくまで、家庭という基盤を侵さない前提の上でのことであった。ヴァレリーは家庭という神話、夫婦という神話、親子という神話、父であり祖父であるという神話に参与したいと願う人間なのだった<sup>40</sup>。

息子に親身に手紙を書き送る一方で、ポッジとの破局後も、ヴァレリーには女性の影が付きまとうようになる。その後、三十代の若く美しい彫刻家であるルネ・ヴォーチエに恋情を寄せるようになり片思いに終わるが、やがて研究者であったエミール・ヌーレとの恋愛を成就させ、1932年頃、最晩年の愛人とな

<sup>39</sup> フランソワは、幼少より音楽教育を受け、父の仲介もあり、フランスの音楽的伝統の一コンセプトである「完全なる音楽家」(演奏、作曲、指揮、音楽理論、音楽史に至るまで全てに優れている音楽家の意)の筆頭で、多数の優れた音楽家を育て上げたナディア・ブーランジェ(1887-1979)に師事した。英文学と音楽の進路とで迷い、1939年には、一時大学での学業を中断したことがあった。その際の父ヴァレリーの、威圧感とは無縁の対応について、後年、フランソワは「ヴァレリーの三大戦間」に記している。

<sup>40</sup> ヴァレリーは家庭というものについて、『カイエ』の中で次のように述べている。「それぞれの家庭は、ひそかに特殊な敵を生み出していく。そして、家族それぞれは、その敵から弾き出されるのだ」

るジャン・オヴワリエことジャンヌ・ロヴィトンとの長きにわたる関係が始まる。愛人に向けて書かれたヴァレリーによる熱烈なトーンの手紙を、実際、我々は読むことができる。そうした事実を知った上で、ヴァレリーのフランソワ宛の手紙を読む時、どうしても浮かんでしまうのは、「ヴァレリーは偽善的な父だったのだろうか」という問いである。ヴァレリーの残したテキストを見る限り、ヴァレリーには、例えばイズーとの悲恋に苦しむトリスタンのような悲壮さはない。自らの不倫に関し、あまりにも後ろめたさが欠如しているのではないか、との批判も確かに免れないようにも思われる。

しかし、そうした断罪すべきかすべきでないかに類するこうした問いは、あまり有益なものをもたらさないのだろう。そのような生き方がヴァレリーの選択だったのだ、と受け止める他はないように思われる。お見合い結婚によって築いた家庭で生活の安定を得て、注意深くもあり、親身でユーモアもある良き父として、子供達を愛おしむのもヴァレリーにとって自然のことであったし、夫婦愛とは別次元の異性との愛の成就も、ことに著名人となってからのヴァレリーが渴望して止まないものであった。見事でもあり不思議なのは、ヴァレリーの不倫によって、家庭の基盤が損なわれることはなかったということである。少なくとも、夫人も子供達も、表立って父親の不倫を非難したり、それによって悲嘆に暮れたりすることはなかった。夫人はヴァレリーに添い遂げ、子供達は、著名人となった父<sup>41</sup>を持つ者としてのプレッシャーに押しつぶされることはなく<sup>42</sup>、それぞれ自分の道を見つけて巣立っていった<sup>43</sup>。彼らが押しつぶされ

<sup>41</sup> 1924年、フランソワ8歳の時のエピソードとして、次のようなものがある。フランソワが級友とともにメトロの入り口にいたところで、父親と鉢合わせしたことがあった。その際、級友に「お父さんは何のお仕事？」と尋ねられたフランソワは咄嗟に「大佐」と答えたという (Denis Bertholet, *Paul Valéry*, Plon, 1995, p.321)。時に家で物を書き、頻繁に旅に出かけ、要人との交際もあるらしい父の仕事を、一言で何と言ったら良いのかわからなかったのかもしれない。父親が社会で担う意味を理解することは、フランソワの成長の歩みと重なっていたと思われる。

<sup>42</sup> 南仏の地方新聞 *Midi Libre* 2012年9月24日付けには「彼らの祖父の名はポール・ヴァレリー」 *Leur grand-père s'appelait Paul Valéry* と題した記事が掲載されており、ポール・ヴァレリーの孫である弁護士のアントワーズ・ヴァレリー、脳外科医のシャルル＝アンブローズ・ヴァレリー、画家で彫刻家のマルティヌ・ルアル・ボヴァン＝シャンボ、弁護士のヴァンサン・ルアルの写真とインタビューが掲げられている。彼らによれば、「普遍性」に押しつぶされ、くつろぎはなく、知性の挑戦ばかりが優っていた」という。バカロレアのフランス語(国語)の試験で祖父ヴァレリーの文章が出てきた際は、思わず答案を白紙で出してしまった、と画家であるマルティヌは述懐している。孫世代でさえ、というべきか、孫世代だからこそ、というべきか、偉大な者を輩出した家系に連なる特異な厳しさが語られている。(https://www.midilibre.fr/2012/09/24/leur-grand-pere-s-appelait-paul-valery,567304.php) ヴアレリーの子供達に関しては、孫世代ほどの硬直的な捉え方はないように思われる。偉大な人物として祀り上げられたヴァレリーと、生身の人間として接した記憶を持つかどうかの相違なのであろうか。

<sup>43</sup> 長男クロードはスポーツ雑誌の編集長になり、長女アガートはルアル家(ヴァレリーの夫人で

ずに済んだのは、この家庭人としてのしなやかな父の姿が彼らの胸底に刻み込まれていたからではないだろうか。

## 5. フランソワに託された赤い手帳『純粹および応用アナキー原理』

フランソワから父からの手紙は、1941年に書かれたものが最後になったわけだが、フランソワは、1944年の冬、父親から「純粹および応用アナキー原理」と表紙に記された赤い手帳を手渡された。「お前にとって、興味深いものもあるかもしれない」と言い添えてのことだったという<sup>44</sup>。また、「たぶんこれを使って何かを書くことはもうないだろう」<sup>45</sup>とも言ったという。

1944年といえば、7月にはパリ解放の歓喜に沸き、ヴァレリーはいち早く「息をつく」と題した記事をフィガロ紙に寄せ、新時代への希望を語り、12月には、ヴォルテール生誕250年記念祭でヴォルテールへのオマージュと新しいフランス創設への思いを見事に重ねた講演を行い、聴衆に深い感銘を与えている。しかし、ヴァレリーの老いと、折からの体調の悪化はとどめられなくなっていた<sup>46</sup>。ヴァレリーがフランソワに手帳を渡したのは、パリ解放から数ヶ月を経て、安堵と共に、新しい時代への移行期への混乱と期待とが錯綜する頃でもあった。フランソワに手帳を託したのは、ロンドン勤務なども経験し、行政や国際政治に関わり始めていた駆け出し公務員であった息子に参考になることがあろうとの思いと、かねてからの体調不良、老いに危機感を抱いたことが重なったことである。

『純粹および応用アナキー原理』というこの耳慣れない題名には説明が必要であろう。フランス語原題は *Les Principes d'anarchie pure et appliquée* である。ヴァレリーはフランス語の「anarchie」という単語を、否定・欠如を表す接頭辞 an と権力、権威の意味を持つ「archie」とにハイフンによって分割し、ヴァレリー独自の造語に変えている。通常、フランス語で「anarchie」といえば、無政府状態、無政府主義、また、さらに広義には無秩序、混乱、乱脈を表す語である。

---

あるジャンニーの双子の妹が嫁いだのがルアール家であった)に嫁いで3人の子供をもうけ、ヴァレリーの死後、プレイヤード版の詳細な年譜を作成している。ただし、不思議なことに、アガートによる年譜には、ヴァレリーの孫(すなわちアガートの子供)誕生についての記述があるにも関わらず、フランソワの誕生についての記述はない。恒川邦夫は、その点を指摘し、プレイヤード版の年譜は再整備されるべきであると主張している(ポール・ヴァレリー『純粹および応用アナキー原理』恒川邦夫訳、筑摩叢書、1986年。訳者あとがき、232頁)。

<sup>44</sup> *Op.cit.* *L'Entre-trois-guerres de Paul Valéry*, p.53.

<sup>45</sup> *Ibid.*, p.53.

<sup>46</sup> ヴァレリーは1945年の5月より死の床につき、7月20日にみまかる。

ヴァレリーのこの覚書の内容からすると、「無政府状態」というものを指すというよりは、政治や権力の問題を国家の枠組みにとらわれず、根本的に捉え直す為に、あえて選び取るイメージのレベルでのアナキーが目指されているものと理解される。本書の邦訳を手がけた恒川邦夫が「アナキー」の語を«anarchie»の訳としたのは、その意味からは首肯できるものである。カタカナの日本語に、概念を融通無碍に受け止める不思議な可塑性があるのである。

ヴァレリーがフランソワに託した赤い手帳には、日付を付された断章が書きつけられていた。最初の記述には1936年4月23日午前10時と、日付ばかりか時間まで記されている。講演で訪れたアルジェの地で、突然に思いついてヴァレリーはこの手帳を書き始めている。最後の断章には1938年9月と記されている。フランス人民戦線の台頭と崩壊への歩み、スペイン市民戦争の勃発、ファシズムの進展といった波瀾の状況下で、断章群は書き継がれた。とはいえ、この手帳の断章には、具体的な政治的動向の記述や、ジャーナリスティックな語彙はほとんど見られない。少なくとも数世紀の時間は視野に入れた上で、「自由」「力」「国家」「革命的」「歴史」といった極めて根本的な政治的概念を再検討し定義し直そうとするのが、断章群の執筆の原動力になっていると読める。パスカルの『パンセ』の中の、自我や権力を巡る断章の筆致を彷彿とさせるものがある。

この手帳は、1944年冬にフランソワにノートが託されてから、実に40年の後、1982年3月15日の日付を持つフランソワによる「ポール・ヴァレリーと政治」の論説も付して、1984年にガリマール書店より公開されることになる<sup>47</sup>。赤い手帳を父から手渡された頃、若き公務員であったフランソワは、『純粹およびアナキー原理』が刊行される頃には68歳に達していた。ジュネーヴのOECD本部のフランス代表部付き大使を長く勤めた経験も積み、リアルポリティクスの最前線を担った。本書の訳者である恒川邦夫は、スイス人の美術評論家の口から洩れたというフランソワの人物評を「きわめつきの紳士で、人から何か聞かれると、さあわからないなあ、と言いながら、その実なんでもわかっている恐ろしく頭のいい人」と「訳者あとがき」に書き留めている<sup>48</sup>。恒川邦夫は同書に収められたフランソワ・ヴァレリーによる論説「ポール・ヴァレリーと政治」について、「淡々とさりげない調子で書かれていながら、その目くばりの周到さ、判断的的確さ、理解の深さにおいて、特筆に値する出来栄えであると思われる」

<sup>47</sup> Paul Valéry, *Les principes d'anarchie-pure et appliquée*, Gallimard, 1984.

<sup>48</sup> 前掲書 ポール・ヴァレリー『純粹および応用アナキー原理』1986年、231頁。

と高く評価している<sup>49</sup>。以下にフランソワの論説のエッセンスを描出しておきたい。

フランソワ・ヴァレリーはこの論説の冒頭で、1932年2月2日という日付を持つヴァレリーの『カイエ』の一節を引き、その断片に記された「穏健なる反政治主義」という言葉を、ヴァレリーの政治に対する自らの姿勢と思考の方向とをよく示す表現であると指摘している<sup>50</sup>。そして、ヴァレリーの生涯における、状況との関わりについて、また、ヴァレリーが影響を受けた書物や思想家について、簡潔かつ見事な見取図を示している。フランソワは、父ヴァレリーの、根本的に徒党を好まず、孤独の中で「精神的象の資本を増やすこと」を身上としていた気質をベースにあるものとして提示し、政治に関することとしては、既成概念を根本的に問いなおすことが自らの任務であり、建設的な仕事であると考えていたヴァレリーのありようを、フランソワは鮮やかに描き出している。

そもそも、ヴァレリーにとって、政治は主たる分野ではありえなかった。ヴァレリーが政治の問題に関わるのは、別途進めている『カイエ』での基礎研究のはざまに偶然のように胚胎される思考であったり、状況や他者の働きかけによって始動する応用研究の中においてであったりした。そのことをフランソワは十分理解した上で、この論説「ポール・ヴァレリーと政治」を執筆している。

ヴァレリーにとっては「従」であった政治というものとの関わりが、「精神的象の資本を増やすこと」それ自体ではなく、行政や国際政治の実務に捧げる人生を送ったフランソワの視点から描き出されているのが、本論説のヴァレリー論としてのユニークさであり、何より文人であった父の存在の政治的な意義が時代のリアリティとともに奥行きを持って論じられていることに、フランソワの知的・精神的把握の深さと鋭さを感じさせられる。これは、単なる文献的博捜によって容易にたどり着けるような境地ではない。『カイエ』を書く朝の時間を聖務のように大切にしていた父の姿、固定観念から自由な父の言動、それらに接していた家族としての時間の積み重なり、また実務により鍛えあげられた政治や歴史に関するセンスの練磨があってこそその論説であり、何より父と言葉を交わし、父の著作や『カイエ』に触れることによって、言葉の定義やニュアンスについての微細な感覚を父と共有していた息子ならではの優れた分析であ

<sup>49</sup> 同書 232頁。

<sup>50</sup> François Valéry, "Paul Valéry et la politique" in Paul Valéry, *Les principes d'anarchie-pure et appliquée*, pp.187-188.

ると言える。また、必ずしも言語化されてはいない父の思いを洞察し、父が生き永らえていたらどのような反応をするだろうか、と思い巡らすフランソワの人生の習慣のようなものが論説からは伺え、親から子への精神の継承の、その動く美しい一例をここに見ることができるように思われる。

## 6. フランソワから見た父—三大戦間のヴァレリー—

1984年にヴァレリーの遺著『純粹および応用アナーキー原理』が出版され、解題ともなるフランソワの論説を付して出版されたことが一つの機縁ともなり、ヴァレリー研究誌である *Bulletin des études valéryennes*<sup>51</sup>の当時の編集長であったセルジュ・ブルジャ<sup>52</sup>は、フランソワ・ヴァレリーに父ヴァレリーについての本を書くことを勧める。フランソワも、ヴァレリーの特に生涯についての事実誤認が研究書に散見されることに危惧を抱き<sup>53</sup>、誤認を正すという意図と、ヴァレリーに対する不当な批判に反論する意味合いもあって執筆を引き受けた。そして書かれたのが『ポール・ヴァレリーの三大戦間』と題した80頁ほどの小著<sup>54</sup>である。本書は、章立てもないエッセイであり、フランソワは、ヴァレリーの身近に生きて者として、しかし私情を抑制しつつ、父ヴァレリーの生を時代の中に正確に位置付けようとしている。

この書物のタイトルにある「三大戦間」という言葉は耳慣れないものであるが、フランソワは、本書のタイトル自体、ある友人の提案によるものであったことを明かしている<sup>55</sup>。友人の提案に接し、まさに自分のイメージに合致していると思ったのだという。ヴァレリーは1871年、普仏戦争でフランスが敗戦を喫した直後に誕生し、人生の後半に差しかかり、二つの世界大戦を経験し、1945年7月に亡くなっている。ヴァレリーは、人生の始まりと終わりが、それぞれ戦争の終結とほぼオーバーラップするという星の巡り合わせであった。ヴァレリーの「脳髓の日記」たる『カイエ』には、ヴァレリーの生涯に当たる四分の

<sup>51</sup> 1974年に発刊されたヴァレリー研究誌。モンペリエ大学のヴァレリー研究所が発行元となり、年3回のペースで発刊されてきたが、2006年発行第100号「ヴァレリーを忘れるべきか」と題された特集号を最後に、刊行は途絶えている。

<sup>52</sup> Serge Bourja。モンペリエ第三大学教授を務めた。

<sup>53</sup> フランソワは、ヴァレリーに関して書かれた論文や記事のなかに大なり小なり不正確な記述を見ないことの方が稀であった述べている。

<sup>54</sup> François Valéry, *L'Entre-trois-guerres de Paul Valéry*, Editions Jacqueline Chambon, 1994. 同書のうち10頁ほどは、ヴァレリーからフランソワに宛てた手紙3通、ヴァレリーからアインシュタインに宛てた手紙2通、編集長（宛名不明）に宛てた1通の手紙が収められた附録となっている。

<sup>55</sup> *Ibid.*, p.12.

三世紀間の暴力、革命、圧制、植民地戦争、大量虐殺といったものへの明示的な言及こそ多くはないものの、フランソワは、そうしたものが、逆説的にもヴァレリーの生に決定的な影響を与えたと見ている<sup>56</sup>。

こうしたパースペクティヴの下に執筆されたフランソワの本著作は小著ながら、ヴァレリーが同時代に対して取った政治的スタンスについての分析と時局に関わる数々の逸話、家庭人、書齋人、生活者としての、家族のみに知り得たヴァレリーの姿の描写とがバランスよく配され、読み応えある一冊となっている。

まずは、父の政治的スタンスについてのフランソワの分析と、政治的逸話の一端を見ておきたい。フランソワは、ことに生前のヴァレリーが犯した政治的な過誤と見なされているものについて、臆せず触れている。ヴァレリーについて、しばしば問題とされることの一つにドレフュス事件の際、反ドレフュス派の側に付いていたという一件がある。フランソワは、ヴァレリーが反ドレフュス派に付いたことは、冷静なヴァレリーにあっては驚くべきことであったと述べているが、ヴァレリーのコルシカ、イタリアの血からして、ブーランジスム勃興の記憶もあり、反ユダヤ的な方向に誘導される傾向があると述べている<sup>57</sup>。また、ドレフュス事件当時に勤務していた陸軍省の砲兵課という職場環境自体、反ユダヤ主義的であり、ヴァレリーが個人として特別に反ユダヤを強く打ち出していた訳ではない、とフランソワは釈明する。

また、フランソワは、ローマへの講演旅行の際、1924年と1933年の二度、ヴァレリーがムッソリーニに会っていることにも言及している。初めてイタリア語で交わした会話で、ヴァレリーはムッソリーニに下品さを見て取り、二度目の接見でその印象は強まったという。ヴァレリーはローマの街角で壁に「信じ、従い、戦う」とのプロパガンダの張り紙があるのを見、「これら三つのことは、最大級に愚かなことだ」と語った、とのエピソード<sup>58</sup>も記されている。

ナチズムが台頭するヨーロッパにあって、ヴァレリーは1941年に、ベルグソンについての講演を行うのであるが、ベルグソンがユダヤ人であるだけに、その行為は一種のレジスタンスと受け止められた。フランソワは、ヴァレリーのベルグソンについての講演原稿を俳優のルイ・ジュヴェが興行先のコロンビアの首都ボゴタで朗読し、スタンディングオベーションで迎えられたとの逸話も

---

<sup>56</sup> *Ibid.*, p.12.

<sup>57</sup> *Ibid.*, p.12.

<sup>58</sup> *Ibid.*, p.36.

紹介している。<sup>59</sup>

また、フランソワは本書の中で、「父があと2、3週間だけでも命存えていたなら、原爆投下について、どのように反応したであろうかと思うことがある」<sup>60</sup>と記している。この問いは、ヴァレリー死去のタイミング（1945年7月20日）を知る人間ならば、誰もが発したくなるものでもあろう。驚くべきことにヴァレリーは、ジャック・ルエフの主催するエミール・ルードヴィッヒのお祝いの昼食会の席で、原爆投下の危惧について、フレデリック・ジョリオ＝キュリーの口から直接に聞いていたというのである。その場にフランソワも同席していたという<sup>61</sup>。

これまで取り上げたのは、『ポール・ヴァレリーの三大戦間』で語られるヴァレリーの政治にまつわる逸話のほんの一部であるが、フランソワは本書で、最も厳しい批判を呼ぶ類いの政治的振る舞いについてあえて俎上に載せるとともに、保守的アカデミシヤンという紋切型では捉えきれないヴァレリーの姿を生き活きと描いている。そこには、フランソワの知的な倫理感が強く感じられる。しかし、本書を通読して、最も深く印象に残るのは、フランソワの語る、家庭での父の姿である。

フランソワは、本書の冒頭で、1940年、リヨンで勉学を続けることができなくなり、ドイツ占領下になってしまったパリの自宅に戻った際の印象を記している。フランソワは、変わったことよりも変わっていないことに驚きを覚えたと書いている。とりわけ、数えきれないノートの白い頁に閉ざされた場所の前、いつもの机についている父の姿が印象的であったという。フランソワは以下のように記している。

過去は廃墟となり、未来には名前がなく、フランスはその首都で首を切り落とされたかのようにであったが、ポール・ヴァレリーは、マラルメ風のショールを羽織り、そこにいた。湿気が多く、アパートマンは既に、大鋸屑を燃やす方式のただ1台のストーブの暖房が入っていた。大鋸屑をくべるのは、ヴァレリーの毎朝の勤めであった。<sup>62</sup>

---

<sup>59</sup> *Ibid.*, p.59.

<sup>60</sup> *Ibid.*, p.63.

<sup>61</sup> *Ibid.*, p.63.

<sup>62</sup> *Ibid.*, p.8.

自分を取り巻く状況がどのようなものになろうと、書斎の机に向かい、朝の静寂の時間を、『カイエ』執筆に充てる父の姿を、フランソワは見てきた。フランソワは、「自らの日々の作者」であった父ヴァレリーの日常生活の証人であるという単純な事実によって、自分が見聞したこと、思うことを語る気になるのだと述べている<sup>63</sup>。フランソワは、ヴァレリーの『カイエ』執筆に向かう揺るぎなさを父のイメージの筆頭に挙げる一方、家庭人としてのヴァレリーが快活であったことにも触れている。

みな若者はそういうものだと思うが、わたしも旅立ちたいという欲求を覚えた。それでもわたしは相変わらず、父ヴァレリーが少しばかり昔風のブルジョア的な雰囲気醸している我が家の団欒に参加していた。それは、いつでもリラックスしていて、温かく、強制されも障害されもし得ない快活さを帯びていることがしばしばだった。そのようなわけでわたしは、父のメモや手紙をいくつか読んで、その気がかりで痛ましくさえもあるトーンに、ヴァレリーの「分裂症」（それについてヴァレリーは『カイエ』の断章のいくつかで言及しているが）にまで至るその人物は、本当にあの父ヴァレリーと同一人物なのだろうか、と、よく思ったものだった。<sup>64</sup>

フランソワは、書斎のヴァレリーだけではなく、『カイエ』の執筆での自己沈潜にコントロールバランスを取るかのように社交を求めるヴァレリーの姿も書き留めている。フランソワは父の談話を以下のように伝えている。

「私はよく社交界に出かけるものだから、スノップ扱いされた…私は好きで行っていたんだ。ディナーに、ご婦人方、いいじゃないか。スノビズムは最良の解毒剤だ。物事や人々をつぶさに見るべきなんだ。それによって、精神からスノビズムが除かれるわけだよ。その反対はずっとひどいね。」<sup>65</sup>

「私はブルジェでもプルスドでもない。彼らは結局のところ、社交界から書く欲求を引き出したのだ。とはいえ、1918年から1919年にかけて、私は夜になるともう仕事する気がなくなった。わたしにはかくも愛しい朝

<sup>63</sup> *Ibid.*, p.10.

<sup>64</sup> *Ibid.*, p.11.

<sup>65</sup> *Ibid.*, p.25.

があり、会話することなくじっとしたままでいる気にはならなかった…カフェに行く連中もいたが、彼らはうまくやっている。]」<sup>66</sup>

ヴァレリーの人生の、特に後半において、社交の持つ意味は大きかった。フランソワは、「ヴァレリーもまた、5時に出かけ始めた」<sup>67</sup>と書くのであるが、これは、ヴァレリーが恣意的な虚構により成り立つ小説というジャンルを揶揄するのに発した有名なフレーズ「侯爵夫人は5時に出かけた」<sup>68</sup>をもじったものである。自己に沈潜する『カイエ』執筆と社交との往還を、父ヴァレリーの基本的なスタイルであるとフランソワは見ている。

フランソワはまた、ある時、アンドレ・ジッドに「君は父上の否定（*dénis*）に苦しんだことは全然ないの？」と尋ねられたというエピソードを紹介している<sup>69</sup>。ジッドの問いにフランソワがどのように答えたかは記されていないが、フランソワは、『ヴァレリーの三大戦間』において、このジッドの問いの提示に続け、ヴァレリーという思想家が、既存の価値観や常識、理論や主義の類いに無批判に乗ることは決してなかったことに触れている。しかし、ジッドが尋ねたのは、そのような思考方法を取るヴァレリーが息子であるあなたを追い詰めることはなかったのか、ということだったと思われる。少なくとも、フランソワが公けにしている文章の中に、父親の否定の気質に苦しんだ、という痕跡は見られない。父としてのヴァレリーは、フランソワも本書に記しているように<sup>70</sup> 快活な南仏人というイメージに近いものだったのだと思われる。

フランソワは『ヴァレリーの三大戦間』の最後の10頁ほどを、父ヴァレリーの最期の姿、病床につき身罷るまでのヴァレリーを描くことに割いている。描かれるのは、死を前にしたヴァレリーの姿であり、ヴァレリーの宗教観である。「机から離れることは自分から離れることだ」と言い、医師から絶対安静を命じられてからも『カイエ』を手放さず、枕元にはヴォルテールの書簡集を置いていた父。敬虔なカトリック信者として、カトリックのしきたりに則って夫を来世へ送りたいと心から願った夫人のジャンニーと、体力も衰え、意識も混濁する中、カトリックとは一線を画す独自の宗教観から、カトリックの看護尼僧や

<sup>66</sup> *Ibid.*, p.25.

<sup>67</sup> *Ibid.*, p.25.

<sup>68</sup> なぜ「公爵夫人なのか」なぜ「5時なのか」と考えると、何の根拠もないのが、小説というジャンルの特徴であり、その恣意性をヴァレリーは疎んじ、このシンプルなフレーズに軽蔑を込めた。

<sup>69</sup> *Ibid.*, p.50.

<sup>70</sup> *Ibid.*, p.12.

神父とのギリギリの攻防に腐心するヴァレリーの姿。父母のそれぞれの思いを理解し、賢明に振る舞う息子たち（長男クロードとフランソワ）の姿。ド・ゴールにより国葬に付すことが決まり、ミサをノートルダム大聖堂ではなく、ヴァレリー夫妻が結婚式のミサに与ったサン＝トノレ・デローの教会で執り行うという選択がなされたことなど、フランソワの筆は克明に伝えている。

## 7. 父の遺贈

1996年9月24日から26日にかけて東京の日仏会館および一橋大学を会場として、「東と西の対話—ポール・ヴァレリーの眼差しの下に」と題された国際シンポジウムが開催された。1945年のヴァレリー死去から50年を超え、ヴァレリーについての本格的な国際シンポジウムの初の日本開催であり、フランソワ・ヴァレリーはこのシンポジウムで来賓として挨拶する予定であったが、すでに80歳に達していたフランソワは、迷いに迷った末、健康状態を考慮して来日を見送った。フランソワは、このシンポジウムの為に長文のメッセージを寄せており、メッセージはシンポジウム会場にて代読され、1998年に刊行されたシンポジウムの成果をまとめた論集の巻頭にフランソワのメッセージが置かれている<sup>71</sup>。同シンポジウムの主催者である恒川邦夫は、1997年3月発行の『一橋論叢』（第117巻 第3号）にシンポジウムの報告記事を発表しており、各研究発表については要旨を掲載したのみであるが、フランソワのメッセージについては、報告記の締めくくりとして全文訳を掲載している<sup>72</sup>。フランソワのメッセージは、ヴァレリー親族としてのシンポジウムでの一通りの挨拶というのに留まらない重みを持つもの感じられる。そこには、ヴァレリーから何を学び、何を受け継いでいくべきかについての真摯なメッセージが込められている。

フランソワは、ヴァレリーの親族として、著作権を持つ立場にあり、法的にもどのように作品という父の遺贈を継承するべきかについて考慮する必要、相続人の任務とは何かという問題に答える必要に迫られてきたわけであるが、フランソワは、それを単なる私的財産の問題という矮小化した文脈では捉えていない。フランソワの結論は「一般読者、特にその作品に興味を持つ可能性のあるすべての人々に、作品へのアクセスを容易ならしめること」<sup>73</sup>というものである。そして、自らの立場について、一般に使用される「権利所有者」(ayant droit)

<sup>71</sup> *Paul Valery Orient & Occident*, Lettres moderne 18, Minard, 1998. pp.13-18.

<sup>72</sup> 『一橋論叢』第117巻第3号、1998年、104-110頁。

<sup>73</sup> *Op.cit.*, *Paul Valery Orient & Occident*, p.14

の語ではなく、語感に違和感があることも承知のうえで、「義務所有者」(ayant devoir) との一種のネオロジズムで形容してみせている<sup>74</sup>。父の著作権によって懐を豊かにする権利がある、というのではなく、父の著作の望ましい読者大衆への継承を媒介するべき任務を負っているとの、子として、親族としての義務感が窺われよう。しかも、フランソワが望んでいるのは、ヴァレリーの著作が「誠実かつ意地悪な読者」<sup>75</sup>に捧げられることだという。「意地悪な読者」とはすなわち従順ではない読者ということである。「ヴァレリーは受動的で従順な読者を要求しないし、望みません。そうではなく、自律した、時に反抗的な精神を好みます」<sup>76</sup>とフランソワは述べている。死後に自分の著作がどのように扱われるべきかについて、ヴァレリーが妻や子供達に直接に希望を述べた形跡はないが、フランソワは、日頃のヴァレリーの言動から、父の望んでいたであろうことを察して、「誠実かつ意地悪な読者」に届けられることを願っていたのだとするに至っている。「誠実かつ意地悪な」という表現は、一種のオクシモロンであり、ヴァレリー自身、オクシモロンを一つの武器のようにしていた書き手である。「誠実かつ意地悪な読者」という表現は、未完で残された晩年の作品「わがファウスト」の冒頭のはしがき部分に見られるものである。フランソワはそれを踏まえていたのではないだろうか。息子のフランソワにも、知的な手厳しさ、常識の突破を身上とする言語表現であるオクシモロンへの嗜好が見られることが興味深い。

フランソワは、シンポジウムの挨拶において、ヴァレリーの作品と人生が残したことの意義について、以下のごとく、凝縮した表現で述べている。ヴァレリーの思考する人間としてのスタンスが見事に捉えられている。

ヴァレリーが望んだのはたった一つのことです。他のことには構わず、自分自身の限界まで行くこと。ヴァレリーが作家として、ある種のオストラシズムに対して、あれほどよく抵抗できたのはそれゆえです。およそ40年の間、特にフランスの知的舞台の前面に登場した様々なイデオロギーのいずれにも恭順の意も示さなかったヴァレリーは、その為にある種の追放状態に置かれていました。彼は、マルクス主義にも、フロイト主義にも、実存主義にも、さらにはいく分か狭い分野である構造主義にも、忠誠を誓

<sup>74</sup> *Ibid.*, p.14.

<sup>75</sup> *Ibid.*, p.14.

<sup>76</sup> *Ibid.*, pp.14-15.

うことはありませんでした。ただ時に、ヴァレリーが持つ驚嘆すべき予知能力によって、それらのイデオロギーとヴァレリーの考えたこととの間に接点が見出されるようなことはありましたが。<sup>77</sup>

このような把握ののちに、フランソワは、詩人としてのヴァレリーと思想家としてのヴァレリーとを引き離してとらえないこと、『カイエ』がポール・ヴァレリーの基本的なテーマの無限の変奏に他ならないことに注意を喚起している。その上でフランソワは改めて、ヴァレリーの継承の意義について透徹した言葉を紡いでいく。シンポジウムでのメッセージを締めくくるとフランソワの見事な一節を以下に引用しよう。

問題は一人の人間、詩人、思想家を擁護することではありません。(ヴァレリーはそうしたことをする必要はないと確信しますし、そういうことは問題になりません。) 全く別のことです。問題はいかにして彼の膨大な探求と内省の努力の軌跡に、彼自身が望んだ形を与えられるかということです。「カイエ」の最後で、自ら自分の探求の成果と呼ぶものを念頭に置いて、ヴァレリー自身、希望を述べています。それは自分が考えたことがさらに他者の知的意識の中で生き続けて欲しいということです。それも専門の研究者の意識の中でだけというのではなく、それぞれ異なった専門領域で傑出した人たち、高いところまで行ったが故に本当の意味の普遍主義者あるいは言葉の完全な意味における哲学者になったような人たちの意識のなかで生き続けて欲しいということです。ラングドックの小さな港が奇しくも産んだこの特異な偶像破壊者もまた、結局のところ、そうした意味の哲学者なのです。<sup>78</sup>

老齢に達し、健康状態が万全ではない中、したためられた挨拶文だとはいえ、まさに渾身の力を振り絞ってのメッセージだと感じられないだろうか。父の遺贈を受け止め、その恵みの意義を考え抜いた者の、この上なく真摯な声があるように思われる。

---

<sup>77</sup> *Ibid.*, pp.15-16. フランソワ・ヴァレリーの挨拶文の訳出にあたっては、恒川邦夫による既訳を参照した。

<sup>78</sup> *Ibid.*, pp.17-18.

## おわりに

以上に、ポール・ヴァレリーと次男のフランソワの間に紡がれてきた関係について、種々のテキストを辿りつつ検討し、ある大きな達成を遂げた精神のありようの継承ということについて考察を加えた。フランソワは、要職にあった知識人に相応しく、父親についての私的な思い出を語るにとどまらず、その精神の共同体における本質的な継承を願って言葉を紡いでいる。恒川邦夫は「一般に、いわば公人となった大作家を近親者があくまで私人として語ることの難しさ—「私の父はある日…」式のディスクールの持つ否み難い魅力と、同時に、払拭しきれない胡散臭さ—は想像以上に大きい…」<sup>79</sup>とし、きょうだいであるアガートもクロードも、身内の限界を乗り越えられていないように思われる、との手厳しい評価を下している<sup>80</sup>が、フランソワの父を評した言葉は、身内の最頂の引き倒し、単なる感傷的な思い出話に終わらない客観的な視点を十分に備えていると言えるだろう。時に大きな文脈を見失い、隘路にはまりこむ危険と隣り合わせでもある研究者にとって、また、ヴァレリーの著作や人生に興味を覚える一般読者にとって、フランソワのメッセージは、大いなる導きとなるように思われる。

フランソワ・ヴァレリーの人生や彼の残したテキストには、父の遺贈が深く刻み込まれている。父の遺贈とは、フランソワ・ヴァレリーにとって、私的なものでもあり、またきわめて公的なものでもある。そもそも、親から陰に陽に何かを引き継ぐということは、いかに平凡な無名の親を持っていたとしても、子が社会的な関係の中で生き続ける限り、何がしか公的な側面を含むのである。我々は、父の遺贈を真摯に最大限の厳粛さをもって受け止めた一つの例を、フランソワ・ヴァレリーに見ることができるのではないだろうか。

<sup>79</sup> 前掲書 ポール・ヴァレリー『純粹およびアナキー原理』恒川邦夫訳、232頁（訳者解説より）。

<sup>80</sup> 同書 232頁。